そこは屋上。
少女達が青春を謳歌する、学園の屋上。
放課後、そこで夕涼みをしながら、
街の景色を見渡すのが少女の日課だった。
その日もいつものように
暮れゆく街を一人ぼんやり眺めていた。
故に少女は気づかなかった。
少女のはるか頭上、
ほんの小さな時空の裂け目から
”それ”が侵食しつつある事に。
気づいた時には既に、
その手足を絡め取られていた。
何に？
それが何かなど、少女が知るはずもない。

むぐ!!っ!?
屋上で一人の少女を
食らった異界生物は
通気口を通り
下階へと侵攻を
開始する。
次に襲われたのは、
今まさに屋上へ
向かおうとしていた
一人の少女。
最初に襲われた少女の
友達である。
天井から伸びた触手に
突然身体を絡め上げられ、
すぐさま口にも触手がねじ込まれ、
悲鳴もあげられない。
……学園の最上階に教室や部室等はなく、
放課後は人通りもほぼ無いため、
声を封じられてしまえば
誰に気づいてもらう事すら出来ない。
絶体絶命である。

程なくして、3人目の少女が餌食となる。
果実のように天井からぶら下げられ、
痙攣する少女に気づき、うっかり近づいてしまった。
それが”只ならぬ事態”であると気づき、
咄嗟に階下へ引き返して
助けを呼ぼうとした時にはもう遅かった。
天井を這うそれの一部は、
既に少女の頭上に到達していたのだ。
瞬く間に手足を絡め取られ、
制服も引き裂かれ、
あられもない姿を廊下に晒す少女。
何が起きているのか、
理解する猶予すら与えられず。
ひッ!!

排水管をくぐり抜け、更衣室から一歩出れば、
そこには当然プールがある。
水泳部の少女達は
翌日の試合に
備えて早々に帰宅。
つい先程、
更衣室で襲われた
少女が最後の一人。
!?
今プールに
残っているのは
病欠の補習などで、
居残りをしている
ほんの数人。
・・・恰好の的である。
無数の排水管が
張り巡らされた
この環境も、
そっと忍び寄り
襲いかかるには
好都合だ。

無論プールで襲われたのは一人ではない。
エスカレーター式一貫校であるこの私立校の
プールなどの共用施設は
様々な学年の生徒が利用する。
ここにいた大半が同時に捕食され、
このプールのあちらこちらで、
今まさに卵を産み付けられている。
助けに来るべき大人の教師達は、
ここが襲われる少し前に姿を消してしまった。
少女達がその事に違和感を覚える頃、
侵食、捕食は一斉に開始され、
故にこの場にいる誰もが〝犠牲者〟であり、
救出の側に回れる者などいない。
絶望が支配するプールで、この少女もまた・・・

プールにいた少女達を
全て喰らい尽くした後
外堀を埋めるように
校庭へと侵食を開始。
何倍にも増殖しながら・・・
校舎を囲うように
侵食範囲を広げれば、
校舎内の生徒達は
たとえ騒ぎに気づいても
脱出する事はもう
不可能になる。
しかし学園内は・・・
未だ静かなものだ。
この怪異の姿を見た
全ての人間は捕食され、
知性を奪われているため、
これだけ犠牲者が出ていても
未だ騒ぎになっていないのだ。
いずれ誰かが気づき、騒ぎになるだろうが、
その時にはもう逃げ場などどこにもない。
残存する全ての少女のバッドエンドは確定しているのだ。

無論、捕らえて終わり、
であるはずがない。
トラップとしてあちこちに
仕掛けられた変異種達も
生殖能力を有している。
巨大な食虫植物のような
その胴体部分の内側には
無数の触手達が犇めき、
餌を欲し蠢いている。
少女に尻に
張り付いたそれらが
肛門を拡げてゆく。

学園の外堀の囲い込みは終わった。
もうこれで誰も逃げられない。
一匹たりとも雌を逃しはしない。
この学園に残存する全ての雌を、
喘ぎ絶頂し孕み
産むだけの苗床に。
異界生物による
この侵攻からは
そんな言外の
意思がはっきりと
伝わってくる。
うじゅ・・・
散り散りに
逃げ惑う
少女達を、
追いかけ、
追い詰め、
捕らえ、
衣服を剥ぎ、
蹂躙する。
うじゅっ
な・・・な・・・
なんですか
これ・・・！？
図書委員を務める
この少女もまた。

襲われ、蹂躙された少女達の
その子宮から生まれ出た触手生物達は
累乗的に、加速度的に増殖を続け、
学園面積の大部分を埋め尽くす程になった。
くっ……！一体、何なのよこれっ！！？
自然との調和を重んじるカトリック系の女子校は
山の中腹にあり、専用バスしか交通手段がないため、
「この惨劇」に気づく者は外界に一人としていない。
孤立無援の少女達が、
ひとり、またひとりと犠牲になってゆく……
何人かの女生徒達が白目を剥いて痙攣し、
獣じみた喘ぎ声を延々発する教室で、
また一つの花が散ろうとしている。
うじゅゅ…
うじゅ……

それらが「少女の胎内」ではなくプールの水中で発芽し成長した変異種、
いわば触手生物のなり損ないがこのゼリー状の生物である。
異界生物の細胞は、様々な物質と融合し、それぞれ独特の変容を遂げてゆくのだ。

そしてコンピューター室では、
一人居残り調べ物をしていた生徒がまた一人犠牲に。
ヘッドフォンをしながら作業をしていた為、
外の混乱に気づくことが出来なかったのだ。
ギチッ
気づいた時には、蜘蛛の巣に
引っかかったカエルのような格好で、
教室内に釣り上げられていた。

レオタードの股間部分を掴んでめくり上げ、
割れ目を確認する。
怪物に手足を絡め取られても、
まだどこか実感の薄かった少女だが、
自らの秘部を露出させられ、
ようやく状況に認識が追いつく。
追いついたところで、
全ては遅すぎたのだが。
ちょっと・・・
やだっ・・・！
離してっ！！
ギチ
ギチギチッ…
ググ…
襲われる前に知覚し、
全力で逃げなければならなかった。
そうできなかった時点で、少女の未来は決していた。
どのような未来かは、語るまでもないだろう。

うぅ・・・
保健室の天井からは、少女が吊るされていた。
いや、保健室だけではない。
学園の至る所で同じことが行われていた。
生殖機構を持たぬ触手の手足達が、
校内に残存する少女達を捕縛し吊るしておく。
そして他の娘への種付けを終えた異界生物が、
吊るされた少女達を次の苗床とするのだ。